

# 日本語の非対立受身文の定義と分類

神田知哉

t.kanda.997@gmail.com

キーワード：直接受身文 非対立受身文 能動・受動の非対立 共感度階層 名詞句階層

## 要旨

日本語の受身文には、「仕事に追われる」のように対応する能動文が意味をなさない、あるいは不自然になるものが存在する。本稿では先行研究を踏まえた上で、「対応する能動文について、統語論的には適格となるが、不自然な意味になる、あるいは自然でも能動文では用いられることが少ない受身文」として「非対立受身文」という定義を提案する。そして、その能動・受動の非対立は、共感度階層や名詞句階層だけでは説明不可能なものであることを示す。また、日本語の非対立受身は、形態論的観点から対応する能動形が存在するものと存在しないものに分類でき、前者は動詞に意味変化が起きているために、後者は能動形が存在しないために対応する能動文が成立しにくいことを指摘する。

## 1. はじめに

日本語の受身文は（直接受身文であれば）能動文との対応があるものとされるが、実際には(1)のように、対応する能動文(1')が意味をなさない、あるいは不自然になるものが存在する<sup>1</sup>。

- (1) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。  
(徳永進『カルテの向こうに』 BCCWJ から)
- b. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。  
(森村誠一『虹の刺客』 BCCWJ から)
- c. マスターの笑みにつられて、圭一も軽く笑みを返した。  
(小杉健治『父からの手紙』 BCCWJ から)
- (1') a.\*仕事<sup>\*</sup>が二人の息子を追う。  
b.?好奇心<sup>?</sup>が隼人を駆る。  
c.\*マスターの笑み<sup>\*</sup>が圭一をつる。

---

<sup>1</sup> これらの受身文は「Xガ Yニ V-(ラ)レル」という形式を持ち、目的語をとる動詞が用いられているから、統語論的に、主語であるXを目的語、二格であるYを主語とする能動文（「Yガ Xヲ V」）を想定できる。このように、直接受身文と同様に、対応する能動文が統語論的には想定できるという点で、これらの受身文は直接受身文の一種だと考えられる（間接受身文は対応する能動文を想定することができない）。

このような受身文の中でも主語の心理的状态変化を表現するものについては、これまで分析がなされてきた(益岡 2000; 林 2009 など)<sup>2</sup>。本稿では、これらの先行研究を踏まえた上で、新たに「非対立受身文」という定義を提案する。そして、その能動・受動の非対立が共感度階層や名詞句階層によって説明可能かを検討する。また、非対立受身を対応する能動形が存在するか否かという形態論的観点から分類し、能動文との非対立の原因を指摘する。なお、用例の収集には現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)を用いた。

## 2. 先行研究と非対立受身文の定義

### 2.1. 益岡(2000)の「機縁受動文」の分析

益岡(2000: 55)は(2)のような受身文について、「通常の直接受動文では二格が有情者の動作主を表すのに対して、これらの例においては、主体が、二格で表される非情物を機縁(原因)として何らかの心理的状态を経験するという事態が描かれている」とした上で、対応する能動文による表現が成り立ちにくいことから、これらを受身文の変種と捉えて「機縁受動文」と呼んでいる。

- (2) a. 日本中の農民は、連年の冷害凶作と、第一次大戦後の長期的不況に打ちのめされていた。  
b. いきなりぼくは、言いようのない屈辱感におそわれた。  
c. 彼は急に疲れにおそわれる。  
d. 私は中学時代にこの歌に心を打たれた。  
e. 私は志乃の鋭い語調に気押されて……。  
f. 私はふいに声をはなつて泣きたいような衝動に駆られた。(益岡 2000: 61)

しかし、実際には、益岡が例として挙げている(2b,c,f)の二格名詞句「言いようのない屈辱感」「疲れ」「声をはなつて泣きたいような衝動」は、ある心理的状态の原因というよりは、むしろ心理的状态そのものと考えられるため、この点についてはより正確な分析が必要だと思われる。

---

<sup>2</sup> 先行研究の中には、能動文と対立しないものは受身文と認めない立場もある。村木(2000: 133)は「受動文であるかどうかは、文構造に決定権があつて、動詞の語形を絶対化するのはいくつか、次のような例は「受動動詞が用いられているものの、対立する能動文をもたないために、受動文とは考えにくい」とする。

『淋しい狩人』は傑作です。あれほどの作品ですから、できるだけセンセーショナルな紹介の仕方をするべきです。それでこそ、僕も報われるというものです。

私にできる仕事など限られていました。

小さな子供が好奇心にかられて万引きを行い、……

(村木 2000: 133)

また、村木(1991: 195)では、「次郎は 火事に やけだされた。」や「次郎は 仕事に 忙殺されている。」のような例が挙げられ、「みかけだけの受動文」と呼ばれている。

また、能動文との対立がない受身文には、主語の心理的状態変化を表すものだけでなく、次のような自然現象を原因とした主語の物理的状態変化を表すものも存在する（神田 2020）。

- (3) a. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。  
 （吉野道男『熱球児』BCCWJ から）  
 b. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。  
 （立松和平『虹色の魚』BCCWJ から）
- (3') a.\*雨が運動靴を打った。  
 b.\*波が舟をもんだ。

さらに、主語の状態変化を表すもののみならず、恒常的（あるいは半恒常的）状態を表していると考えられる受身文の中にも、能動文との対立がない受身文は(4)のように存在する<sup>3</sup>。(4a)では、中田の兄は常に何人もの世話人が周りにいる環境で生活していたということが表現されている。(4b)では、八幡神の由来は謎めいているということが表現されている。どちらも、主語の恒常的（半恒常的）状態を表していると考えられる。なお、このような受身文にはテイル形が用いられることが多い<sup>4</sup>。

- (4) a. 中田には二歳年上の兄がいたが、つねに跡取りとして何人もの世話人に囲まれていた。  
 （中野不二男『脳視ドクター・トムの挑戦』BCCWJ から）  
 b. 八幡神の由来は謎に包まれていますが、[…]  
 （義江彰夫『知の技法』BCCWJ から）
- (4') a.? 何人もの世話人が中田の兄を囲んでいた<sup>5</sup>。  
 b.\*謎が八幡神の由来を包んでいる。

以上より、能動文との対立がない受身文の全体を扱うには、益岡（2000）の「機縁受動文」の分析をさらに拡張する必要がある。

## 2.2. 林（2009）の「慣用的受身文」の分析

林（2009）は「慣用的受身文」（「X が Y に V-(ラ)レル」）の特徴として、以下を挙げ

<sup>3</sup> 村木（1991: 195）では、次の受身文に対応する能動文は、日本語としては不自然な要素が強く、「みかけだけの受動文」だとされている。これらも恒常の状態を表すものと言える。

松本城は 濠に かこまれている。  
 この地方は 天然資源に めぐまれている。

<sup>4</sup> このことは、Matsumoto (1996) の仮想変化表現 (subjective-change expression) とも関わるものと思われるが、詳細については別稿に譲ることとする。

<sup>5</sup> この能動文自体は自然であるが、(4a)の受身文とは異なる解釈（実際に何人もの世話人が中田の兄の周囲を取り囲んでいた、という解釈）の方が優勢になると考えられる。

ている。

- (5) a. 受身の形でしか表わせない表現のことであり、対応する能動文を持たない。
- b. 主語である「X」は「受け手」の立場にあり、「Y」から何らかの形で心理的影響を受けるのである。
- c. 「Y」を省略することができないため、いつも「～ニ V-(ラ)レル」の形で現れる。
- d. 「V-(ラ)レル」の意味は、複数の意味を持つVの一つの意味を受身化したのではなく、受身化した典型的意味からさらに派生したものとして考えられる。

(林 2009: 72-73)

(5b)にあるように、林も益岡と同様、慣用的受身文を主語が心理的影響を受けるという事態のみを表すものとしており、それ以外の例については触れられていない。

また、「慣用的受身文」については、どこまでを「慣用的」と見なすかにも問題がある。大石 (2009, 2010) は、「不安に襲われる」のような、感情語彙と「に襲われる」という形式の結びつきをコーパスを用いて調査している。その結果によれば、「<感情語彙>が襲う」という能動文より「<感情語彙>に襲われる」という受動文が選好される傾向がある (表 1)。また、生物と無生物はほぼ期待度数どおりに出現している (表 2) ことから、この傾向は無生物主語を避けるという日本語の性質とは独立のものである、と大石は分析している。以上から、「<感情語彙>に襲われる」という表現は、受身文として十分慣用的だと言えるだろう。

表 1. 感情語彙の構文形式別分布 (大石 2010: 13)

	「に襲われる」	「が襲う」	合計
感情	64(45)	14 (33)	78
感情以外	168 (187)	152(133)	320
合計	232	166	398

注：カッコ内は期待度数； $p < 0.001^{***}$  (フィッシャーの正確確率検定)

表 2. 生物無生物の構文形式別分布 (大石 2010: 13)

	「に襲われる」	「が襲う」	合計
生物	140 (132)	87 (95)	227
生物以外	92(100)	79(71)	171
合計	232	166	398

注：カッコ内は期待度数

しかし、林 (2009) は対応する能動文がないもののみを慣用的受身文とし、「深い徒労感に襲われる」「罪の意識に襲われる」のような「襲われる」は、対応する能動文が成立する

ために慣用的受身文には該当しないとしている<sup>6</sup>。このように、「慣用的受身文」の「慣用性」とは非常に曖昧なものだと言える。

### 2.3. 非対立受身文の定義

以上のように、益岡（2000）の「機縁受動文」の分析や、林（2009）の「慣用的受身文」の分析は、不十分な点があり、また、主語の心理的状态変化を表現するものしか扱っていない。能動文との対立がない受身文の全体を捉えるためには、「雨に打たれる」や「謎に包まれている」のような受身文も含めた定義が必要である。

能動と受動の非対立について考える上では、「仕事に追われる」のような完全に非対立なものから、「不安に襲われる」のような、対立はしているものの実際の使用に大きな偏りがあるものまで、広い範囲を射程に入れる必要がある。そこで、その非対立の度合いの差も考慮に入れられるように、新たに本稿では、「対応する能動文について、統語論的には適格となるが、不自然な意味になる（意味をなさないものも含む）、あるいは自然でも能動文では用いられることが少ない受身文」として「非対立受身文 (non-oppositional passive sentence)」という定義を提案する。また、非対立受身文に用いられる受身を「非対立受身 (non-oppositional passive)」と呼ぶこととする<sup>7</sup>。

この非対立受身と同様に、使役や相互についても非使役、非相互との非対立が見られることがこれまで指摘されてきたが（村木 1991; 黒木 1996; 仁田 1998 など）、これらの例も「非対立使役」、「非対立相互」と呼ぶことができる。

- (6) a. 太郎は仲間と議論をたたかわせた。 (村木 1991: 182)  
 b. 今年この畑は休ませている。 (黒木 1996: 23)
- (7) a. 構えた拳銃を発射し、札束をワシづかみにしている銀行強盗。凶暴な顔つきで車で必死に逃走をはかるが、警官たちと渡り合い、ついに逮捕される。  
 b. 詩界の評価においては、一つはジャーナリズムへむけての発動と、もう一つは各賞による詩壇的なものと、この二つがせめぎあうこともなく、互いに存在を無視するかのように存在している。 (仁田 1998: 47)

### 3. 共感度階層と名詞句階層

<sup>6</sup> シャミシエワ（2018）は、林（2009）の慣用的受身文の議論を元としているが、次のような「襲われる」の用例を慣用的受身文として分析している。このことから、この「慣用的」ということの曖昧性が見て取れるだろう。

ドアが開いたとたん、眼の前がくらくらするような衝撃におそわれた。  
 するとぼくは、なにかわけのわからぬ不安と悲しみにおそわれてしまう。 (シャミシエワ 2018: 77)

<sup>7</sup> 印欧語に見られる *media tantum* (あるいは *middle deponent*) という、対応する能動形を持たず、中動態でのみ用いられる動詞は、*non-oppositional middle* と呼ばれることもある。この種の動詞との類似性から、「非対立受身」という名称を提案した。

一般的な能動文と受身文の使い分けに関しては、これまで久野の共感度階層や角田の名詞句階層などによって説明がなされてきた。これらによって、ここまで見てきた能動・受動の非対立についても同様に説明できるようにも見える。本節では、この二つの階層について概観した上で、これらによって非対立受身文に対する説明が可能かを検討する。

### 3.1. 共感度階層

久野 (1978) は、受身文などの言語現象を話者という観点から分析するにあたって、次のような「共感 (Empathy) 度」という概念を導入している。

#### (8) 共感度

文中の名詞句の  $x$  指示対象に対する話し手の自己同一視化を共感 (Empathy) と呼び、その度合、即ち共感度を  $E(x)$  で表わす。共感度は、値 0 (客観描写) から値 1 (完全な自己同一視化) 迄の連続体である。 (久野 1978: 134)

そして、 $E(x)$  と他の共感度との大小関係を指定する等式、不等式を、話し手の  $x$  に対する「視点」と呼んでいる。その上で、次のような共感度階層 (empathy hierarchy) が提案されている。

#### (9) 発話当事者の視点ハイアラキー

話し手は、常に自分の視点をとらなければならない、自分より他人寄りの視点をとることができない。

$$1 = E(\text{一人称}) > E(\text{二・三人称}) \quad (\text{久野 1978: 146})$$

#### (10) 表層構造の視点ハイアラキー

一般的に言って、話し手は、主語寄りの視点を取ることが一番容易である。目的語寄りの視点をとることは、主語寄りの視点を取るのより困難である。受身文の旧主語 (対応する能動文の主語) 寄りの視点を取るのは、最も困難である。

$$E(\text{主語}) > E(\text{目的語}) > E(\text{受身文の旧主語}) \quad (\text{久野 1978: 169})$$

そして、これらの階層には、次のような一般的な制約が働いているとされる。

#### (11) 視点の一貫性

単一の文は、共感度関係に論理的矛盾を含んではいけない。 (久野 1978: 136)

また、Kuno and Kaburaki (1977) では、次のような共感度階層も提案されている。(12)では話し手、聞き手、第三者の順に共感しやすいとする「談話参加者の共感度階層」、(13)では人間、人間以外の動物、物の順に共感しやすいとする「人間性の階層」が示されている。

(12) *Speech-Act Participant Empathy Hierarchy*

It is easiest for the speaker to empathize with himself; it is next easiest for him to empathize with hearer; it is most difficult for him to express more empathy with third persons than with himself or with the hearer:

Speaker > Hearer > Third Person (Kuno and Kaburaki 1977: 652)

(13) *Humanness Hierarchy*

Human > Animate Nonhuman > Thing (Kuno and Kaburaki 1977: 653)

ここまでの議論からは、共感度階層によって、非対立受身文は以下のように考えられることになる。ここでは、(14a)の非対立受身文と、それに対応する能動文(14b)を例にとる。

- (14) a. 太郎は仕事に追われている。  
b. 仕事が太郎を追っている。

まず、(14a)は「太郎」が主語、「仕事」が受身文の旧主語であるから、(10)の表層構造の視点階層からは「太郎」寄りの視点をとっていることになる。また、「太郎」は人間、「仕事」は物であるから、(13)の人間性の階層からもやはり「太郎」寄りの視点ということになる。共感度関係に論理的矛盾は生じておらず、(11)の視点の一貫性は保たれているため、(14a)は自然な文として受け入れられる。その一方、(14b)は、(10)の階層からは「仕事」寄りの視点をとっていることになるが、(13)の階層からは「太郎」寄りの視点をとっていることになり、共感度関係に論理的矛盾が生じているため、不自然になると考えられる。

## 3.2. 名詞句階層

久野の一連の研究は、共感度という観点から階層関係を示したものであるが、角田 (2009 [1991]) は名詞句の階層関係に注目し、Silverstein (1976) の提案している名詞句階層に修正・追加を行ったものを図 1 のように示している。角田 (2009: 50) によれば、上記の久野の (9)(12)(13)の三つの階層はこの図 1 の階層を部分的に表しており、これらを組み合わせれば、ほぼ同じものになる。

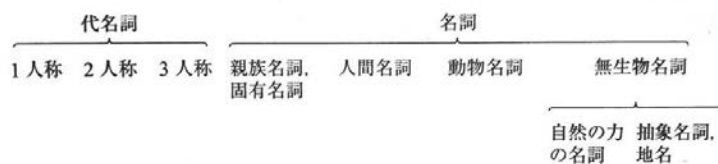


図 1. シルバースティーンの名詞句階層 (角田 2009: 41)

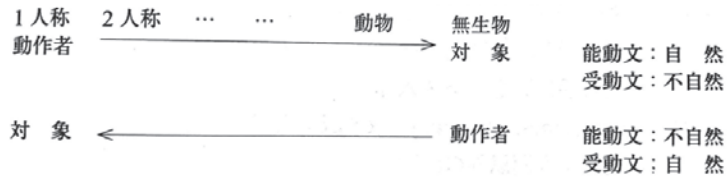


図 2. 日本語の能動文と受動文 (角田 2009: 49)

角田は、日本語の能動文と受動文の使い分けに関して、図 2 のようにこの階層の上位にあるものから下位にあるものへ動作が向かう場合は(15)のように能動文を用いるのが自然であり、下位にあるものから上位にあるものへ動作が向かう場合は(16)のように受動文を用いるのが自然であるとする。

- (15) a. 花子は焼き芋を食べた。  
 b.?焼き芋は花子に食べられた。

- (16) a.?大波は私をさらった。  
 b. 私は大波にさらわれた。 (角田 2009: 48)

同様に、心理的状态変化を表す非対立受身文に当たる(17)の例についても、「仕事」は無生物名詞であるのに対して「海部さん」は固有名詞であり、動作が下位の階層から上位の階層へ向かうために能動文を用いると不自然になると主張している。

- (17) a.?仕事が海部さんを追っている。  
 b. 海部さんは仕事に追われている。 (角田 2009: 48)

また、図 1 の階層では、「地震」「雷」「火事」「津波」「大水」のような「自然の力の名詞」は、その他の無生物名詞より上位に位置づけられ、自然の力の名詞が主語、その他の無生物名詞が目的語となる場合、無生物主語の他動詞文であっても自然になるとされている<sup>8</sup>。

- (18) a. 台風が九州を直撃した。  
 b. 激しい雨と風が窓を打つ。 (角田 2009: 51)

<sup>8</sup> 角田 (2009: 52) は、このような無生物主語の他動詞文の中には、次のように受身文でも言えるものも存在し、名詞句階層で動作者と対象の距離が小さいためであるという可能性を指摘している。

津波が三陸地方を襲った。  
 三陸地方が津波に襲われた。 (角田 2009: 51-52)



### 3.3. 共感度・名詞句階層と非対立受身文

以上のように見てみると、共感度階層や名詞句階層によって、一般的な能動・受動の使い分けと同様に、能動・受動の非対立についても説明できるように思われる。

しかし、林 (2009: 55) は、「太郎は花子に惹かれた」というような例を挙げ、「太郎」と「花子」は同じ階層の名詞であるにもかかわらず「花子は太郎を惹いた」が不自然になることを指摘し、慣用的受身文 (非対立受身文) が対応する能動文を持たない理由は名詞句の性格の問題だけではないとしている。そもそも、この「太郎は花子に惹かれた」という文における「太郎」と「花子」の関係は被動者と動作主ではなく、経験者と刺激であり、事態に対する捉え方の問題が関わっていると言える。

また、一般的な受身文の場合は(15)(16)のように、不自然ではあるものの、能動文で受身文と同様の事態を表現することができる。その一方で、非対立受身文の場合は、対応する能動文が意味をなさなかったり、受身文と同じ事態を表すことができなかつたりするため、一般的な受身文と同様に分析することはできない場合が多いと考えられる。

そして、特に自然現象に関する非対立受身文については、角田の名詞句階層にそもそも当てはまらない例も多い<sup>9</sup>。以下に(3)を再掲する。

- (3) a. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。  
b. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。

(3)について「雨」や「波」などは自然の力の名詞であるのに対し、「運動靴」や「舟」はそれ以外の無生物名詞である。したがって、角田の説に従えば能動文が自然になり、受身文では不自然になるはずであるが、実際はそうではない。

以上から、能動と受動の非対立についての説明としては、共感度階層や名詞句階層だけでは不十分だということになる。

## 4. 非対立受身の分類

日本語の非対立受身は、形態論的観点から対応する能動形が存在するものと存在しないものに分類できる<sup>10</sup>。

<sup>9</sup> 角田の名詞句階層における「自然の力の名詞」の位置について、熊 (2009) は次のような自然現象名詞主語の他動詞文がやや不自然になることをアンケート調査によって明らかにし、角田説は修正の必要があるとしている。

- ? 台風が窓ガラスを割った。  
? 大雪が電車を止めた。  
? 洪水が民家を流した。  
? 台風が窓ガラスを叩いた。 (熊 2009: 128)

これらはすべて、自然の力の名詞を主語、それ以外の無生物名詞を目的語とする能動文であり、角田の名詞句階層によれば自然になるはずの文である。

<sup>10</sup> Haspelmath (2007) は reciprocal deponent について、同様の分類を行っている。reciprocal deponent とは、

#### 4.1. 対応する能動形が存在する非対立受身

非対立受身である(19)の「追われる」「打たれる」「もまれる」「誘われる」には、それぞれ「追う」「打つ」「もむ」「誘う」という対応する能動形が存在する。

- (19) a. 二人の息子が交代で泊まっているが、仕事に追われて、十分な看病ができない。 (Cf. (1a))  
 b. はいている運動靴さえ、雨に打たれ痛痛しい程に傷んでいる。 (Cf. (3a))  
 c. 舟は惰性で走っていき、止まると、むしろ波にもまれて揺れた。 (Cf. (3b))  
 d. 土手で遊んでいたお糸が、花売りの声に誘われて花籠に走り寄った。  
 (千野隆司『冬花火』BCCWJ から)

しかし、このような非対立受身の中でも(20)の「ひかれる」や「つられる」などは、「ひく」「つる」という対応する能動形が存在するにもかかわらず、受身接辞が付加された形で定着することで自動詞と認められ、独立した項目として(21)(22)のように辞書にも掲載されている。

- (20) a. わたしはあのデザインに惹かれて買いました。 (Yahoo!知恵袋、BCCWJ から)  
 b. マスターの笑みにつられて、圭一も軽く笑みを返した。 (Cf. (1c))  
 (21) ひかれる【引かれる・惹かれる・《魅かれる】(自下一) [「引く」の受動形] [心などが] 引きつけられる。「子の愛に一／山の話に一／彼の大らかなところに引かれた」  
 (22) つられる【釣られる】(自下一) [「釣る」の受動形] ①誘われるようにして、何かの行動に出る。「太鼓の音に一」②だまされる。「甘言に一」

相互の標示と相互的意味を持ちながらも、非相互的な無標の形式が存在しない動詞であり (Haspelmath 2007: 2109)、非対立相互と一致する概念だと言える。Haspelmath は reciprocal deponent を、対応する無標の形式が存在しない strong reciprocal deponent と、対応する無標の形式は存在するが、そこから相互的意味を直接的に派生させることができない weak reciprocal deponent に分けられるとする。この reciprocal deponent の分類と非対立受身の分類を比較すると、対応する能動形が存在する非対立受身は weak reciprocal deponent と、対応する能動形が存在しない非対立受身は strong reciprocal deponent と対応すると言える。

##### weak reciprocal deponents

- |              |         |                              |      |       |                         |
|--------------|---------|------------------------------|------|-------|-------------------------|
| a. Turkish   | gör-üş- | 'meet' (= 'see each other')  | gör- | 'see' |                         |
| b. Norwegian | slå-ss  | 'fight' (= 'hit each other') | slå  | 'hit' | (Haspelmath 2007: 2110) |

また、Haspelmath (2007: 2110) によれば、weak reciprocal deponent はしばしば語彙化していると言われ、その成立は次のように説明できる。weak reciprocal deponent は通常の派生的な相互を起源としており、使用頻度が高かったために一部の話者に丸ごと記憶された。これが意味変化の起きる前提条件となり、その変化の結果として、現在では全ての話者がこれらの相互を記憶する必要が生じた。対応する能動形が存在する非対立受身が weak reciprocal deponent に対応しているとする、この Haspelmath の分析は、能動形が存在する非対立受身は意味変化によって慣用的意味を獲得している、という 4.1 節の議論とも一致すると言えるだろう。

(新明解国語辞典, 2020)

非対立受身が自動詞として確立するということは、認知文法で言う分析可能性の減少 (loss of analyzability) とも関わると考えられる。分析可能性とは、複合的表現について、各構成要素が表現全体の概念化にどれだけ貢献していると認識されているか (Langacker 1987: 292) である。複合的表現が定着すると、全体がひとまとまりとして捉えられるようになり、各構成要素が意識されなくなって、分析可能性が減少する。「ひかれる」や「つられる」のような非対立受身は、動詞と受身接辞という構成要素があまり意識されなくなっており、分析可能性が減少していると言える。

神田 (2020) では、状態変化を表す非対立受身文について、動作主の行為に起因する被動者の状態変化を本来は含意しない動詞に意味拡張が起きることで、受身文独自の意味として状態変化を含意するようになってきているために能動・受動の非対立が生じているとした。例えば、(23)は「追う」と「打つ」の基本的な語義の例と考えられるが、どちらも被動者の状態変化を含意しない。しかし、このような動詞が非対立受身文に用いられると、意味拡張によって受身文という環境において独自に状態変化を含意するようになると考えられる。

- (23) a. 洛平が犯人を追うがとり逃がす。 (嵐山光三郎『徒然草殺しの硯』BCCWJ から)  
 b. 虎は、女の頬を、平手で思いきり打った。  
 (門田泰明『首領たちの欲望』BCCWJ から)

しかし、(4) (以下に再掲) で示したような恒常的状态を表す非対立受身に用いられる「囲む」「包む」などの動詞は、基本的な語義としても被動者の状態変化を含意する。これらは、次のように統一的に説明できる。

- (4) a. 中田には二歳年上の兄がいたが、つねに跡取りとして何人もの世話人に囲まれていた。  
 b. 八幡神の由来は謎に包まれていますが、[…]

(4a)では、中田の兄が周囲を取り囲まれていたことが表現されているのではなく、何人もの世話人がいる環境の中で生活していたことが表現されている。(4b)でも、八幡神の由来が何かに覆われていることが表現されているのではなく、謎めいているということが表現されている<sup>11</sup>。これらの例も、本来の語義からの意味変化により受身文独自の慣用的意味を獲得しているという点で、他の非対立受身と共通していると言える。以上より、対応す

<sup>11</sup> 志波 (2015: 359) は、「謎に包まれている」という表現について、抽象的な包摂関係を表し、「～は謎だ」という名詞文相当の意味になるとしている。

る能動形が存在する非対立受身については、動詞の本来の語義から意味変化が生じて慣用的意味を獲得しているために、能動文と対応しないものと考えられる。このことは、シャミシエワ（2018）も指摘するように<sup>12</sup>、語彙化として説明できるだろう。

#### 4.2. 対応する能動形が存在しない非対立受身

非対立受身である(24)の「打ちひしがれる」「揺られる」「気圧される」「うなされる」の無標の形式「打ちひしぐ」「揺る」「気圧す」「うなす」は、少なくとも現代には存在しない。

- (24) a. 病院で意識を取り戻した彼女はデイビッドが死んだことを告げられ、悲しみに打ちひしがれる。  
(Yahoo!ブログ、BCCWJ から)
- b. かたや貧しい田舎の若者は、富を求めて都会を目指し、夜行バスに揺られるのだ。  
(岡崎大五『添乗員疾風録』BCCWJ から)
- c. 見たこともないほど張りつめた大智の表情に気圧され、瀬里は青ざめるしかない。  
(崎谷はるひ『耳をすませばかすかな海』BCCWJ から)
- d. 昨日は悪夢にうなされ起こされました。  
(Yahoo!ブログ、BCCWJ から)

また、次の非対立受身の「駆られる」「苛まれる」に対応する能動形「駆る」「苛む」は現代でも存在するが、無標の形のまま用いられることはほとんどない。

- (25) a. 好奇心に駆られて隼人は豆腐の金を払うと、源助の跡をつけた。  
(Cf. (1b))
- b. 義家は激しい後悔に苛まれていた。  
(高橋克彦『炎立つ』BCCWJ から)

これらの非対立受身は、そもそも能動形がない、あるいはほとんど用いられないため、対応する能動文も存在しない。ただし、歴史的には能動形が存在していたものも多く、それらは4.1節で挙げた例のように、動詞の本来の語義から意味変化が生じた後に能動形が使用されなくなったものと考えられる。

#### 5. まとめ

本稿では、先行研究における「機縁受動文」「慣用的受身文」の分析を踏まえた上で、新たに、「対応する能動文について、統語論的には適格となるが、不自然な意味になる（意味をなさないものも含む）、あるいは自然でも能動文では用いられることが少ない受身文」として「非対立受身文」という定義を提案した。そして、その能動・受動の非対立

<sup>12</sup> シャミシエワ（2018: 80-81）は慣用的受身について、形の上では受身接辞が付き、文法的な規則によって派生されているが、意味の上ではその規則性が失われていることを指摘し、このことを語彙化として説明している。

は、共感度階層や名詞句階層だけでは説明不可能なものであることを示した。また、日本語の非対立受身は、形態論的観点から対応する能動形が存在するものと存在しないものに分類でき、前者は動詞に意味変化が起きているために、後者は能動形が存在しないために対応する能動文が成立しにくいことを指摘した。

本稿では触れられなかったが、「非対立受身文」という定義においては、動作主が想定できない(26)のような例も扱うことができる。そして、このような非対立受身の中にも、(27)のように対応する能動形が存在しないものがある。これらの非対立受身については、今後の研究で考察を深めていきたい。

- (26) a. のちに舞台としての機能は失われ、台上には「武当宮」が建てられた。  
(奈良行博『五感で味わう中国大陸』BCCWJ から)
- b. しかしこうした問題は、どうやら大学といった特殊な職場に限られるようだ。  
(清家篤『定年破壊』BCCWJ から)
- c. さらに、野菜摂取量も少ない現代の日本人は慢性的なカルシウム不足の状況に置かれているのだ。  
(『サンデー毎日』BCCWJ から)
- (27) その瞬間に、すべての苦労は報われたのである。  
(松永真『松永真、デザインの話。』BCCWJ から)

## 参考文献

- Haspelmath, Martin (2007) Further remarks on reciprocal constructions. In: Vladimir P. Nedjalkov (ed.) *Reciprocal constructions*, 2087–2115. Amsterdam: John Benjamins.
- 神田知哉 (2020) 「日本語の慣用的受身文の意味分析：『仕事に追われる』と『雨に打たれる』の比較から」『東京大学言語学論集』42: 117-129.
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』東京: 大修館書店.
- Kuno, Susumu and Etsuko Kaburaki (1977) Empathy and syntax. *Linguistic inquiry* 8(4): 627-672.
- 黒木京子 (1996) 「使役文「X ガ Y ヲ/ニ V サセル」の用法：X が有情・Y が非情の場合」『国語学研究と資料』20: 18-28.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of cognitive grammar volume 1: Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- 林青樺 (2009) 『現代日本語におけるヴォイスの諸相：事象のあり方との関わりから』東京: くろしお出版.
- 益岡隆志 (2000) 『日本語文法の諸相』東京: くろしお出版.
- Matsumoto, Yo (1996) Subjective-change expressions in Japanese and their cognitive and linguistic bases. In: Gilles Fauconnier and Eve Sweetser (eds.) *Spaces, worlds, and grammar*, 124-156. Chicago: University of Chicago Press.
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』東京: ひつじ書房.

- 村木新次郎 (2000) 「ヴォイス」 中村明 (編) 『別冊國文學』 53: 132-135.
- 仁田義雄 (1998) 「相互構文を作る「V シアウ」をめぐる」 『阪大日本語研究』 10: 1-52.
- 大石亨 (2009) 「概念メタファー理論と構文文法の統合、およびその含意」 『日本認知言語学会論文集』 9: 426-436.
- 大石亨 (2010) 「メタファー実現への文法的制約とその動機付け」 『明星大学情報学部研究紀要』 17: 9-20.
- シャミシエワ・ナズグリ (2018) 「語彙的ヴォイスと文法的ヴォイスの関係について：慣用的受身・使役表現に基づく分析」 『日本語・日本文化研究』 28: 72-82.
- 志波彩子 (2015) 『現代日本語の受身構文タイプとテキストジャンル』 大阪: 和泉書院.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In: Robert M.W. Dixon (ed.) *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.
- 角田太作 (2009 [1991]) 『世界の言語と日本語：言語類型論から見た日本語 改訂版』 東京: くろしお出版.
- 熊鷹 (2009) 「自然現象名詞主語の他動詞文について」 『学習院大学人文科学論集』 18: 125-146.

## 辞書

- 山田忠雄・倉持保男・上野善道・山田明雄・井島正博・笹原宏之 (編) (2020) 『新明解国語辞典』, 第8版. 東京: 三省堂.

## 資料

- 国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』  
([https://pj.ninjal.ac.jp/corpus\\_center/bccwj/](https://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/)) [2021年4月アクセス]

# The Definition and Classification of Non-oppositional Passives in Japanese

Tomoya KANDA

t.kanda.997@gmail.com

**Keywords:** direct passive, non-oppositional passive, non-opposition between active and passive sentences, empathy hierarchy, nominal hierarchy

## Abstract

Some passive sentences in Japanese (e.g. *shigoto ni owareru*) do not have readily acceptable active counterparts. This paper shows that this phenomenon (referred to as “non-opposition”) cannot be explained solely by the empathy hierarchy and the nominal hierarchy. Classifying non-oppositional passives into those that have corresponding active morphological forms and those that do not, it goes on to argue that the two subtypes do not have acceptable active counterparts for different reasons: the former because of the semantic changes that the verbs have undergone and the latter because of the absence of active morphological forms.

(かんだ・ともや 東京大学大学院)